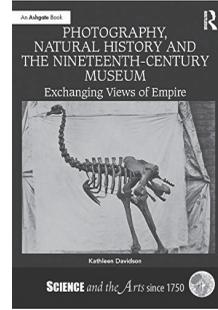


## 書評

Kathleen Davidson, *Photography, Natural History and the Nineteenth-Century Museum: Exchanging Views of Empire*

(Abingdon, Oxon and New York: Routledge, 2017). ISBN 978-0-367-33116-0 (paperback).

菊池 好行



本書は、19世紀後半における写真術、自然史<sup>1</sup>、博物館とイギリス帝国との間の関係を、以下の2本の軸に沿って学際的に縦横に論じた意欲作である。1つ目の軸は1850～80年代における自然史特に古生物学の確立・発展に当時の最新視覚技術であった写真が果たした多種多様な役割、もう1つはイギリスの植民地であったオーストラリア、ニュージーランドなどの博物学者、博物館が同時期に本国のそれに伍する地位を築いていった過程である。著者キャスリーン・デイヴィッドソンはオーストラリアの博物館で写真コレクションのキュレーターを務めた後、シドニー大学にて美術史で博士号を取得した、19世紀視覚文化を専門とする研究者である。本書はその折提出された博士論文をもとにしている。ただし本書は評者の専攻分野である科学史、科学技術論の二次文献をも幅広く渉猟して書かれており、科学史への貢献としても評価できる。以下かいつまんでアプローチの特色と内容を述べる。

19世紀後半には標本はもちろんのこと、おびただしい数の写真が博物学者、博物館の間でやり取りされ、世界的な自然史ネットワークが出現した。自然科学に果たした写真の役割というと、自然現象を記録する媒体としての役割が真っ先に思い浮かぶであろう。自然史、古生物学でいうと、発掘された遺物などの標本の記録、ドキュメントとしての役割であり、その重要性はいうまでもない。しかし写真は他にも重要な文化的・社会的役割を果たしているとデイヴィッドソンは主張する。

第1に著者は、19世紀後半に中産階級の間で肖像写真、特に名刺型写真が爆発的に流行したことを踏まえて、自然史の専門家、博物学者としての社会的地位 (respectability)、権威 (authority) を確立するための自己演出の道具としての肖像写真の役割を強調する。その背景として、博物学者が専門職業化するのがほぼ同時期の19世紀後半にあたること、(例えば) ドイツ諸邦に比べてイギリスでは自然科学全般の専門教育の制度化がやや遅れたことから社会的地位を演出する代替手段が必要とされたこと、の2点を著者は指摘している。科学者の専門職業化、あるいは知識の生産者としての権威構築の問題自体は科学史でよく取り上げられるテーマであるが、通常考察の対象とされるのは専門用語など科学論文で用いられる様々なレトリック、あるいは高等教育や学会、職業資格などの社会制度である<sup>2</sup>。本書の新しさは、写真のやりとりを博物学者の地位、権威の問題と結びつけたところにある。

第2点は、自然史の中心が19世紀後半に、現存する自然物を取り扱う動物学、植物学から地質学、古生物学、人類学など歴史的諸学 (historical sciences) に徐々に移行したことに関わる。これら諸学の特色は、現存しない過去の事物の復元にある。英国博物館自然史部門 (British Museum, Natural History、のちロンドン自然史博物館) の長としてイギリス古生物学界に君臨したリチャード・オーウェン (「恐竜 dinosaur」の名付け親として著名) など博物学者は、骨などの遺物から (しばしば巨大な) 絶滅種の標本を復元し、博物館に展示した。復元された標本を撮影した写真が広く行き渡ることにより、ヴィクトリア期の一般大衆の想像力を刺激し、自然史・古生物学そのもの、あるいは標本を所蔵する博物館を宣伝する役割を果たした。言い換えると、現在我々が思い浮かべるような、一般向けに開かれた自然史博物館のあり方を根本から規定したのが写真であると著者は主張しているのである。

第3は本書の副題で表されている通り、イギリス帝国の様々な地域を映像化することに関連する。これらの (しばしば風光明媚な地形の) 映像が流通することにより、イギリス本国の人々にとっては帝国の偉大さ、植民地の人々にとっては自らの植民地のすばらしさをアピールする役割を果たした。オーストラリアのニューサウスウェールズやニュージーランドなど、

19世紀中頃に自治権を獲得したばかりの植民地人にとっては特に切実な問題であった。実際、デイヴィッドソンが重要視している写真の文化的・社会的役割はいずれも植民地で活動する博物学者によって巧みに活用され、博物学者と彼らが属する博物館の地位を本国に対して従属的な地位から自立的な地位に押し上げていたことが本書のいくつかのケーススタディーで明らかとなる。このように本書の第1と第2の軸が有機的に絡み合っている点が、本書の最大の強みと言えよう。

本書のケーススタディーをなすのが4つの章である。第1章“Paper Museum: Photography and natural history at the British Museum” (21-65頁)では英国博物館自然史部門における写真の導入過程を考察している。第2章“Museum traffic: Naturalist correspondents and the advent of photography in the colonial museum” (66-107頁)では、オーストラリア、シドニーのオーストラリア博物館 (Australian Museum) のキュレーターとして活躍したドイツ出身の博物学者ジェラード・クレフト (Gerard Krefft)<sup>3</sup>に焦点を当て、植民地博物館への写真の導入を分析している。第3章“The rhetoric of exemplarity: Portraiture and the naturalist as celebrity” (108-153頁)では、ダーウィン、オーウェンなどイギリス本国の博物学者の肖像写真に焦点を当て、科学者を対象とする肖像写真をいくつかの類型に整理し、彼らの社会的地位・権威の構築の観点から考察している。

これらの章はデイヴィッドソンのアプローチを理解するのにいずれも重要ではあるが、ここではニュージーランド南島、クライストチャーチのカンタベリー博物館の初代館長として活躍したドイツ出身の地質学者・博物学者ジュリアス・ヴォン・ハースト (Julius von Haast) に焦点を当てた第4章“Nature as spectacle: Encountering the moa from Christchurch to Madras via London and Paris” (154-195頁)に注目したい。ハーストは写真、水彩画などの視覚媒体を戦略的に用いることによって彼自身、あるいはカンタベリー博物館の世界的地位を高めていったからである。その契機となったのが南島の北端に位置するネルソンの地形学、地質学的調査 (1861年) である。ハーストは発見した山々を科学者にちなんで命名し、景色を描かせた水彩画を添えて調査報告書を欧米の著名科学者や大学図書館、新聞社に寄贈するなど、本国人のプライドを満足させると同時に植民地のパブリシ

ティの向上を周到に進めていった。1866年にクライストチャーチ近郊のグレンマークで、ニュージーランドにかつて存在した巨鳥モアの骨が大量に出土したことは、ハーストとカンタベリー博物館に絶好のチャンスを与えた。モアはオーウェンによる絶滅種の標本復元の対象であったばかりでなく、ダーウィンが『種の起源』で展開した自然選択説の議論でも重要な役割を果たしていたからである。カンタベリー博物館で復元されたモアの骨格標本、剥製はまもなく写真撮影され、そのうちのいくつかはハースト自身と共に撮影されていた。これは一方では、標本の大きさを示すための科学的ドキュメントとしての意味があったが、他方では、博物学者ハーストの肖像写真としての意味合いもあった。本書第3章で議論されているように、ある科学者を、その人物が研究対象としている事物と一緒に写真に収めることによって、その写真が当該人物の社会的地位、科学者としての権威を示す有力な道具となったからである。このハーストの「肖像写真」がカンタベリー博物館の建物のイラストとともに『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の紙面を飾るなど(本書177頁)、同館のパブリシティ向上にも威力を発揮したのである。

以上、紙面の都合上かいつまんだ紹介となったが、イギリス本国、ニューサウスウェールズ植民地、ニュージーランド植民地の3地域にまたがる自然史、博物館史、写真史の該博な知識に裏打ちされた本書の「読みごたえ」の一端はお伝えできたかと思う。ただし本書にも問題がないわけではない。本書ではあくまでイギリスの「公式帝国」に属する地域が研究対象となっており、中国の清朝など「非公式帝国」は全く言及されていない。また水彩画、リトグラフなど写真以外の視覚媒体は散発的に取り上げられる程度である。これらのトピックが本書の主題に含まれないことはもちろんであるが、本書での議論の多くは「公式/非公式」「写真/非写真」の比較によってさらに深まる可能性があり、そのような比較に資する先行研究への言及はあってしかるべきであろう。その意味で、清朝中国で活動したイギリス人博物学者と現地の画家との協働によるハイブリッドな博物画の誕生を論じた Fa-ti Fan の著作<sup>4</sup>への言及がなかったのは残念であった。また、写真術を主題とする著作の割には、写真術そのものの発展に関するまとまった言及がなかったことも意外であった<sup>5</sup>。

以上若干の問題点も指摘したが、これらは本書の価値を減じるものではなくない。写真術、自然史、博物館はいずれもヴィクトリア朝文化の一翼を担う文化事象である。本誌の読者諸氏に広く一読を進めたい。

——愛知県立大学准教授

注

1. Natural history の邦訳としては自然史、自然誌、博物学などが存在するが、本稿では「自然史」に統一する。ただし Natural history の担い手である naturalist の邦訳としては、「自然史研究者」では硬すぎると判断し、「博物学者」とする。
2. 科学者の専門職業化については、とりあえず古川安『科学の社会史—ルネサンスから 20 世紀まで』（ちくま学芸文庫、2018 年）第 8 章「科学の専門分化と職業化」（172-195 頁）を参照されたい。専門職業化を含む、イギリス科学の社会史の最新の研究状況については、大野誠編『イギリス近代科学の社会史』（昭和堂、出版予定）をご覧いただきたい。
3. 後述のハーストと同様ドイツ系であるが、英語圏で活躍したことからここでは英語風の音訳を採用する。なおドイツ系の博物学者が英植民地の博物館で重要な役割を果たしていたことから、植民地の博物学者ネットワークが、イギリス本国のみならず他のヨーロッパ諸国とも連結していたコスモポリタンな性格を有していたことを著者は指摘している（本書 8 頁）。
4. Fa-ti Fan, *British Naturalists in Qing China: Science, Empire, and Cultural Encounter* (Cambridge, Mass. and London: Harvard University Press, 2004) 特に第 2 章 “Art, Commerce, and Natural History” を参照のこと。
5. 写真術全般については Greg Mitman and Kelley Wilder, eds, *Documenting the World: Film, Photography, and the Scientific Record* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 2016) を参照のこと。